

生き方

発見

真鍋博

文藝春秋

の旅

●著者紹介

昭和7年愛媛県生れ
多摩美術大学 美術研究科修了
日本SF作家クラブ会員
日本ペンクラブ会員
著書に
「ひとり旅教育」
「自転車讃歌」
「たびたびの旅」
「真鍋博 オリジナル 1975」
「思考の憶え描き」
「真鍋博の植物園」などがある。

生き方発見の旅

昭和五十二年六月十日第一刷

定価 八八〇円

著者 真鍋博
まなべ ひろし

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京 (二六五) 一一一一

郵便番号 一〇二

本文印刷 理想社印刷
附物印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

韓国岳に三回のぼった運転手？ 5

船に乗って歯を治しに来た先生 43

日本のシルクロードを見つけた人 73

夫婦二人でやっている旅館の主人 103

ワインの町の片腕秘書 135

いつも行列の絶えないお茶屋さん 163

講演会の講師に講演をしたリンゴ園主 199

装釘
真銅
博

生き方発見の旅

韓国岳に三回のぼった運転手？

「あと五、六分で枕崎です」

「いま、市内に入りました」

「ここが市の中心地です」

「あと一分で会場です」

ハンドルをにぎったKさんは、車の進行状況を細かく説明してくれる。そういわれるたびにだんだん心配になってきた。人口は何人だか知らないが、枕崎というれっきとした市なのに、全然、人影が見えない。これで、今日の文化講演会に人が集まるのだろうか。

朝、鹿児島市のホテルを出てから、ずっと付き添ってくれている県文化センター副館長のDさんは、

「地方都市の日曜日ってこんなものですよ」

となくきめてくれるが、人どころか猫一匹いないのだ。

商店街に入って驚いた。どの店もシャッターをおろして、静まりかえっている。

市民会館に着いて、教育長に聞いてみると、

「今日は月一回の〃家庭の日〃です。商店街も休みで、全市あげて家庭サービスをする日です。したがって、今日は何人集まるやら、なにしろ文化講演会なんて当市ではじめてのことですから――」

「それにしても立派な市民会館ですね」

「ここで浪曲なんかやりますと、人がえらく集まります。漁師町なので政治も好きで、選挙演説なんかもこれまた人がわんさと来ます。しかし、文化講演会というのはどうでしょうかねえ」

とケロリとしている。

枕崎市ではじめてのその文化講演会は、とにかく終わった。集まりは良くなかったが、終わってみると役目をはたして気がらくになった。

車に乗ると、Kさんは「お話の間にアブラ満タンにしてみました」と、またハンドルをに

ぎった。

せっかくカツオブシの本場へ来たんだからと、会場近くのカツオブシ工場に車を止めてもらった。プーンとカツオを蒸すにおいがして、長靴をはいたおばさんたちが忙しく働いている。これじゃあ、講演会どころではないはずである。カツオブシの値段の高いのもよくわかった。一メートルもあるカツオも蒸して乾かせばこんなに小さくなるのか……。

海のおいもかいだし、カツオブシ工場も見学したし、あとは鹿児島空港に向かって走るだけ。

「同じ道を走るのもつまりませんから、車の少ない裏道を行います」とKさんは言う。

「ぼく、裏道、大好きです。道がせまいからゆっくり走らねばならないし、ゆっくり走るから、町並みも、道行く人々の顔もよく見られて面白い。道も曲りくねっているので、景色も変化があつていいですよね」

枕崎に来る時は指宿いぶすきをまわって開聞岳かいもんだけを見ながら薩摩半島の東側を通過して来たが、帰りは西側を走って伊集院いじゅういんをまわって空港に出るらしい。

「それにしても、ずっと車を運転してくださってご苦労さまでした。しかも、道、おくわしいですね、さすが県内——」

「いや、実は私もはじめてで、二、三週前の休日にリハールをやりました」

「えっ、ぼくのために」

「いや、真鍋さんもさることながら、その前に副館長も乗っけて来なければならぬ用がちょっとありましたので——」

「いやいや、恐れ入りました。わざわざ、しかも休日に」と恐縮すると、

「真鍋さん、だまって乗ってらっしゃるので、榮です。この前の文化講演会の女流作家のT先生は、大隅半島の根占ねじめで講演なさったのですが、その朝、霧島山の韓国岳かおくに登りたいとおっしゃいました。そこで、やはり休日にリハールで韓国岳へ登ってみました。そして所要時間をたしかめ、朝五時に宿を出て……とスケジュールをたてて課長に見せますと、女の先生が登られるのに男の足で計ったのでは、と首をひねりましたので、同じ事業課の若い女の子に、一緒に登って、時間を計ってみてくれないかと頼みました」

「ほう……」

「彼女、ちょっと考えこみました」

「そこで……」

「なるほど、考えてみると嫁入り前の若い女の子、四十男の一言で一緒に山へ行くはずがな

い。そこで両親の許可をえなければ……と前夜、その子の家へ行つて説明し、お願いしました」

「女の足でどうでしたか」

「それが、その日すごい霧で一メートル先も見えず、遭難しかねない状態でした。それでも霧の晴れ間をぬって登ると前と十分のちがいでした。そこで当日はむくつけき男がT先生とご一緒するより、彼女にお供させた方がいいと思ひまして、朝、えびの高原の国民宿舎に先生をお迎えに行き、ふもとに着いて、さあこれから登ってもらおうと空を見上げますと、急に頂上の方が曇って天氣があやしくなってきました。女二人で登らせて、もしものことがあつては……と心配になり、結局わたしもまた登りました」

「それじゃあ、三回も同じその山へ」

「山へ登るのはたいしたことないんですが、先生は米のご飯は召し上らないとおっしゃるので、彼女の家でサンドイッチをつくり、車の通る帖佐^{ちようさ}までお母さんに持ってきてもらつて、山の上で食べていただきました。そして、会場の根占町^{ねうり}まで大隅半島をまっしぐらに南下して走ったのですが、山に登ったままの顔で講演に立つのはとおっしゃって、途中、美容院へお寄りになり、講演会では、『愛について』という実にいいお話をなさいました。前日から

来られ、朝五時に起きて、山登りをしたあとで、あれだけのお話なさるんですから、先生のタフさと真面目さには頭がさがりました」

「いや、T先生もご立派だけれど、Kさん、あなたも同じ山に三回も登るとは……」

「いや、その後がありましてね。次の年は奄美大島あまみへ行って話をしていたくことになっていたので、鹿児島に着かれた晩、台風が近づいていました。行きはよいよいでも、帰りの飛行機は台風にひっかかり、二、三日お帰りになれないかもしれないと申し上げますと、『名瀬でたのしみに待っていてくれる人にわるいから行きます。二、三日足止めをくつてもわたしは作家だから、向こうで仕事ができばいい。いま若い人向きに現代訳をしている古典の仕事があるので、その本さえあれば仕事ができるのだが、東京においてきたので……』と考えこんでおられました。たしか、枕草子だったと思うんですが……」

「それで」

「もう夜でしたから、本屋は閉まっているし、二、三人の館員の家へ電話しましたが、誰も枕草子などもっていない。困ったなと思った時、うちの短大へ行っている娘の机の上に置いてあったのをふと思い出し、車で二時間あまりかかるのですが、伊集院の家に帰り、先生におどけたのは夜中。先生は『これさえあれば、一週間島にいても大丈夫よ』と言ってくだ

さった時、ああこれで今日の仕事終ったと思いました」

「お疲れになったでしょう」

「ええ、家に帰ったら、もう午前二時でした」

「いやあ、ますますおそれいました。どちらもご立派」

「半年後、先生からサイン入りのその本が送られてきました」

「まいった、まいった、と思っている間に車はもう空港に着いた。」

Kさんは、車のトランクを開けて、きのう始良町^{あいち}で講演をした時にもらった記念品を出してくれた。

これをいただく時の場景がまた変っていた。

話しおわって公民館の館長室で休んでいると、教育長さんが入ってきてぼくの前に立ち、「起立!」と言ったので、ぼくがびっくりして立ちあがると、「礼!」と号令がかかった。ぼくがあわてておじぎをすると、

「今日のご苦労さまでした。これは当町文化財の帖佐人形です。記念にどうぞ……」

と言つてうやうやしくノシのかかった箱を差し出した。ここまでくると、こちらも心得たもので、三歩さがって礼をすると、教育長はニヤッと笑った。

「元校長先生ですね」と声をかけると、「このクセがなかなか抜けんでのう、しかし、物事はケジメが大切じゃ」とおっしゃる。

とにかく、号令つきのいただきものは生まれてはじめてであった。

帖佐人形を仕事場に置くと、素焼きに原色の泥絵具を塗った、素朴というより稚拙な土人形は、誰の目にもとまるらしく「これは何ですか」とよく聞かれる。

この人、元校長・西さんの「礼！」は徹底していて、今年もらった年賀状にも、帖佐人形もお宅の応接室で故郷を偲んでいることでしょう。（起立の姿勢で——）

いただいたハガキ大事にしています。

今後とも御指導の程を御願いたします。「礼」と書いてあった。

ぼくもすぐ「礼！」を出したのはいうまでもない。

空港のロビーでこの帖佐人形を受けとりながら、

「この土人形、つくってる人はもうあの町に一人しかいないといっておりましたが、いつ